

◇ 国 語

国 7-1～国 7-15 まで 15 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一月二十一日の『朝日新聞』文化欄に神谷美恵子氏の「人間であること、精神の限界を作る脳、可能性を秘める『右半球』」と題する論説がのせられていた。これは日本の精神科医が左右の脳の機能差と精神構造との関係に目を向けた最初の反応ではなかったろうか？ 神谷氏の鋭い感性によって^(注)この問題がとり上げられたわけである。論文に述べられている内容は興味深い示唆に富む紹介であつたし、私はこの結論については強い共感を覚えた。ただ、この論文のうちに、今までの日本の精神医学のかなりの部分、否、精神医学に限らない、人文系、自然科学を含めて実に多くの日本人の研究者の研究のあり方についての共通の問題点を含んでいることが多少気がかりであつた。氏の論文を詳しく紹介するスペースが無いのでその一部を引用すると、

……ところがごく最近、ある国際精神医学雑誌のページをマンゼンと繰っていたら、また叫び声をあげそうになった。おもしろい米国の論文にぶつかったからである。その内容をかいつまんでいうと、ここ四、五年の間に明らかにされてきたところによれば、脳の左半球には科学技術的なものの考えかたを支えるような合理的、分析的思考、言語、計算などの中枢があり、右半球には芸術や宗教的心情の基盤となるような直観的・総合的・非言語的認識の中枢があるという。それがとくに側頭葉にあるのかどうかは言っていないが、ともかくこれが音楽や、ものの空間的配置に関する想像的かつ創造的な能力を発揮させるものとなり、またふん囲気や象徴的なものを感じとらせ、宇宙全体の中における自己の地位を自覚させる機能を持つという。論者の考えでは、この両半球の間にバランスを保ちつつ発達することが人間性をゆたかにすることであり、心の平和と外部での生産的活動とを両立させることにもなるのではないかという。ヒトが地上の現実によく適応するためには合理的思考や言語が必須であるためであるろうか、左半球がよく発達して優位に立つに至っていることはよく知られているが、右半球を無視軽視しすぎるのは心に大きな欲求不満をおこすと考えられる。

ア 現代の社会はまさにこの行き方に拍車をかけている。たとえば、普通の知能テストで測っているのは、もっぱら左半球の機能であるし、学校も社会もIQの高い人を優遇し、いやが上にもその機能にシゲキを与えて、これを発達させる。現代社会の歪とは、この右半球

イ が原因だと論者はいう……

こういう新しい課題に対する認識のしかたは、今までの日本の多くの学者が用いてきた定石の一つであつて、日本の近代化を能率よく進めてきた最も手固いパターンであるから、一般の読者にはなんの抵抗もなく理解できたはずである。私がここでやはり気にかかるのは、神谷氏のいう「……また叫び声をあげそうになつた。おもしろい米国の論文にぶつかったからである……」という発見の対象が文献にあつたということなのである。このような方法も研究の一面として、私もその価値を認めることにウではないが、専門外の人であれば全く問題にならないことが、心のどこかにひっかかるのである。「右半球は何をしているのか」という疑問がなぜ目の前にいる人間の脳のメカニズムに直接問ひかけようという発想法に結びつかないのであるか？ 西欧化百年の歴史のうちについ忘れ去られていた創造へのシコウが、かつての有力な定石に対して違和感を抱かせるのかも知れない。「発見した」と叫びながら裸のまま街に飛び出したというギリシャのアルキメデスのコジを引用するまでもなく、発見の喜びとは、たゆまざる自然への問ひかけを通して新事実を見出したことに対する湧き出るような叫びなのではないか。この極めて当り前のことが頭の中では理解されていながら、日本の心の研究者の具体的な研究態度に定着していなかつたのではなからうか。精神医学者の多くが、目の前にいる日本人の脳を研究の対象とするよりは、西欧人で得られた膨大な文献的所産の理解に全精力を傾け、一層奇妙なことに、日本人の心の研究も文学作品を対象とするという、いふなれば、他人の頭脳の所産にイソソするという迂遠な形で精神の生理や病理が論じられてはいなかつただろうか。そこから得られた結論には日本人の脳から発見されたという事実の記載が欠けているばかりか、日本人も西欧人も脳のメカニズムは変わらないという原則に基づいて心を理解しようとしているのである。国際基督教大のコンフランクスで、西欧人で得た脳の左右の機能分担をそのまま他の言語圏の人々の価値観の解釈に、あてはめようとする西欧学者の論旨からすると、言語間で差を認めないという点では西欧も日本も共通しているのかも知れない。しかし基本的な両者の差は、西欧人が人脳の実証的研究から得た事実は、西欧人には確実に応用可能なデータであるということなのである。ここに両者の心の科学にとり組む姿勢に基本的な差が見出される。

(角田忠信『日本人の脳』による)

(注) はじめてこの問題がとり上げられた ……この本は一九七八年に出版された。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A マンゼン

- ① マンシンの力をこめる
- ③ キョマンの富を得る
- ⑤ ジョウマンな文章

② ジマンの息子

④ どマンナカに当たる

1

B シゲキ

- ① フウシのきいた文章
- ③ 間違いをシテキする
- ⑤ 将来を占うシキンセキだ

② 大統領のシモン機関

④ 会社のジョウシ

2

C シコウ

- ① コウラク日和に恵まれる
- ③ 子会社にシュッコウする
- ⑤ けがのコウミョウ

② オンコウ篤実な人柄

④ コウテキシユを得る

3

D コジ

- ① ガンコ一徹な性格
- ③ 石油がコカツする
- ⑤ 敵に囲まれコリツする

② コキョウに錦を飾る

④ 勇気をコブする

4

E イソン

- ① イギョウを成し遂げる
- ③ 明治イシンを迎える
- ⑤ 親のイサンを引き継ぐ

② イサイかまわぬ態度

④ 原稿をイライする

5

問二 空欄 [ア]・[イ]・[ウ] に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

[ア]

- ①したがって
- ②たとえば
- ③さらに
- ④ところが

[6]

[イ]

- ①発達
- ②厚遇
- ③冷遇
- ④退化

[7]

[ウ]

- ①無知
- ②やぶさか
- ③なかんずく
- ④賛成

[8]

問三 傍線部(二)「左右の脳の機能差」とは具体的にどのようなものか。あてはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

[9]

- ①左半球には合理的、分析的思考などの中枢があり、右半球には直観的、総合的思考の中枢があること
- ②右半球はものの空間配置に関する能力を担当し、左半球はIQを高める能力を担当すること
- ③左半球は心の平和を育て、右半球は地上の現実に向く適応するための力を育てること
- ④右半球は芸術的な思考をつかさどり、左半球は言語的な思考をつかさどること

問四 傍線部(二)「これ」は何を指すのか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ①精神医学雑誌の論文
- ②左右の脳の機能差
- ③脳の右半球の中枢
- ④脳の左半球の中枢

10

問五 傍線部(三)「この行き方に拍車をかけている」とあるが、「この行き方」とは具体的にはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ①現実によく適応するために合理的思考や言語が必須であること
- ②心の平和と外部での生産的活動とを両立させること
- ③脳の右半球を無視軽視しすぎることに
- ④脳の両半球の間にバランスを保ちつつ発達すること

11

問六 傍線部(四) 「定石」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ① 物事を処理する時の決まった手順
- ② 特定の人の間で伝授される奥義
- ③ 身に染み付いて離れない習慣
- ④ 努力をしなくてもよい楽な道

問七 傍線部(五) 「最も手固いパターン」とはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ① 自然への問いかけを通して新事実を見出すこと
- ② ふとしたきっかけでおもしろい論文を見つけたこと
- ③ 目の前にいる日本人の脳を研究の対象とすること
- ④ 膨大な文献的所産の理解に全精力を傾けること

問八 傍線部(六) 「違和感を抱かせる」とあるが、「違和感を抱いている」のは誰か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

① 一般の読者

② 筆者

③ アルキメデス

④ 神谷氏

問九 本文の内容と一致しないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ① 西欧学者は西欧人で得た脳の左右の機能分担を、他の言語圏の人々の価値観の解釈にあてはめようとしている。
- ② 日本の精神医学者の多くは、他人の頭脳の所産に基づいて、精神の生理や病理を論じてきたのではないだろうか。
- ③ 心の科学にとり組む姿勢に関して、西欧学者と日本人学者との決定的な違いは、言語間で差を認めるかどうかである。
- ④ 日本の精神医学者は、日本人の脳から発見された事実に基づいて心の研究をおこなう、という態度に欠けている。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人はなぜ痩せたがるのか？ 健康への配慮からなのか？ それとも……？ 筆者は今たまたまフランスに歴史人類学の調査に
来ていてこれをしたためているため、フランスの健康雑誌などから「痩せること」に関連するデータを探し出して拾ってみた。
それによるとフランスでは、「太り過ぎ（標準体重よりも上回る）」と診断されている女性が成人女性の二十六パーセントを占
め、男性の場合はそれよりもはるかに多い三十九パーセントにのぼる。こちらでは男性の方が女性よりも肥満の傾向にある。フ
ランスの国立統計研究所が一九七〇年から行ってきた調査結果によれば、女性の「太り過ぎ」人口は年々確実に減少してきてい
る。しかし興味深いのは、女性の四十パーセントから六十パーセントが、今よりもっと「痩せたい」と望んでいることである。
女性にはそもそも「瘦身願望」が潜在しているのだろうか。いずれにしても、女性たちの夢見る「理想の体重」は、栄養学や健
康への配慮から医学的にはじきだされてくる標準体重の^Aシヒョウとは必ずしも一致しないようだ。

では、このような「瘦身願望」はどこからやってくるのだろうか。瘦身願望が女性に強いのはフランスに限ったことではない。
肥満率からいえばフランスよりも低い数字をもつはずの日本でもそれは一般的に見られる。たしかに女性の身体は、古今東西い
つの時代にもどこの地域にあっても、概して男性以上に商品としての価値が高かったため、外観の好ましさを美しさで評価され
ることが相対的に多かったにちがいない。けれども写真も映画もテレビもなかった時代には、女性の外観としての美しさの基準
は概して曖昧なままであった。ところが現代では、高度な印刷術や写真技術、映像技術によって特定の身体が理想化され
ア 化され、それらが公衆の前に無遠慮に差し出されてくる。

また、「痩せていること」が美の不可欠の要素と考えられるようになったのも比較的新しいことである。たとえば吉祥天女像
のあのふくよかさをみよ。あるいは中世の絵巻物に登場するまるまるとした女房たちの^Bうりざね顔をみよ。ぎりぎり生きていく
のに食べるのが精いっぱいであった時代に、特殊な修行者でもない限り、いったい誰が、痩せることなど夢見ただろう。一方現
代の先進諸国には食糧があり余り、 unnecessary 消費が繰り返されている。そんな中でわたしたちは日々、ダイエットを^Bシウレイ

するさまざまな広告や情報、映像にさらされ、スリムを理想とする美人のイメージを刷りこまれている。そして知らず知らずのうち「痩せていた方が美しい」「痩せていた方が健康である」と教えられている。しかも「痩せることは可能でありまた必要でさえある」という暗黙のメッセージが同時に記憶の中に送り届けられている。だが何度も言うが、現代ほど痩せていることやスリムな女性が称揚され、理想化されている時代はないのである。

近年、拒食症や過食症に苦しむ若い女性（中学、高校生を含む）が増えてきているのも、こうした文明の袋小路に、その過剰なメディアの商業戦略に負うところが大きい。思春期や精神的に不安定な時期にふと自分の容姿が気になり始めた少女たちにとって、ダイエットや簡単な食事制限は身近な解決策である。しかし急激な食事制限や絶食はかえって飢餓感を強めるために、試みは逆に狂おしいまでの強い食欲をよびさまし、かつてないほどの過食へと身体をせきたてていく。結果は目にみえている。せつかくのダイエットの努力も水の泡、当初の数字をはるかに上まわる体重のリバウンド。このリバウンドは結局、自己への信頼を傷つけ身体への嫌悪をつのらせる。この「シッター」「キウウチ」からはい出し自分を取り戻すにはどうすればよいのか。「嘔吐」である。いったん胃の腑に収めたものをすぐさまその場で吐きだしてしまうこと、そうすれば達成されていたはずの減量の地点まで身体を一挙に「初期化」することができるだろう。だが、ここまでくると、もはや意識は後戻りできない危険な段階へとつき進んでいる。吐きだすことで得られた意志の「力」への一時的な信頼は、「食べる」という「めくるめく快楽」にもう一度だけ浸ってみたいとする激しい欲望に道を開き、あんなにも後悔して二度とするまいと誓ったはずのあのおそるべき過食へとふたたび身体をひき戻して行くからである。気がつく、過食から嘔吐へ、嘔吐から過食へ……というやっかいな反復運動の中にはまりこみ、身動きできなくなつて、うずくまっている。

こうした現象を第三者として見ていて驚かされるのは、身体が心や魂の動きから切り離されて加工できるとみなされていることである。事実、現代のさまざまなダイエット法やあれこれの痩身術は、そのほとんどが外的な働きかけによる身体の管理を前提にしている。一日何カロリーときめられた規則的な食物摂取、決まった時間に行われる何キロかの歩行あるいは体操、水泳……。それらは几帳面にノートに書き留められ記録され、一週間、一か月、三か月、半年という時間の長さで吟味されチェツ

クされていく。計画的かつ規則的プログラムによる身体の征服。そこには身体が外的にかつ普遍的な働きかけによって加工しうるのだという楽天的なまでの信念がある。

しかし、外から装飾を施すことによつてではなく、姿形や重さとしての身体そのものを變形することで美しくなれると信じられるようになったのは、比較的新しいことなのではないだろうか。ミツシエル・フーコーがその未刊の著書『性の歴史』において述べているように、古代ギリシャの養生法においては、「身体にたいして心が戦いを挑む」ことなど一度も考えられたことはなかった。むしろ身体と心との抜き差ししない関係こそが問題にされていたのである。フーコーによると、古代ギリシャの食餌療法は性の営み以上に養生法として重要な位置を占めていたが、それは単なる減量術ではなく、他の養生法と同様、心の養生術をも含む「完璧さ」を備えていた。そこでは「身体がそれ固有の掟に従つて導くことができるよう、心が自らを正していくこと」が求められていたのであり、心の内から「錯誤を除去し、想像を抑え、欲望を制御していく仕事」が心にも同時に課せられていたのである。

現代の「身体加工」に欠けているのは、こうした心あるいは魂への配慮であり、心と身体との抜き差しならぬ「イ」関係に繊細な注意を向ける身体観ではないだろうか。ちなみに心と身体が不可分のものとしてとらえられていた時代には「美」の観念も今とは異なっていただろう。「美」は目に見える特定の「形」の中に存するものではなく、目に見えない心の運動、それを表現する空間の「型」としての身体運動の中で了解され、実践されていたはずだからである。目に見えない心と身体「美」をもう一度回復していくこと、それがどんなに困難に見えようとも、二十一世紀の不可欠な課題であることはほぼまちがいないさそうだ。

(長谷川博子「瘦身願望」による)

問一 傍線部A・B・C・Dと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A シ|ヒョウ

- ① 公共のシ|セツを利用する
- ② シ|フクを肥やす
- ③ 憂国のシ|シ
- ④ シ|シユに富む
- ⑤ 処世のシ|シン

16

B ショウ|レイ

- ① 病気のショウ|レイを研究する
- ② 電気のショウ|リヨク化
- ③ イシ|ョウを凝らす
- ④ スイシ|ョウ品を買う
- ⑤ ショウ|セイに応じる

17

C シツ|タイ

- ① 全力シツ|ソウする
- ② シツ|ソに暮らす
- ③ シツ|ケイな奴だ
- ④ 強制シツ|コウする
- ⑤ シツ|プ薬を貼る

18

D キュウ|チ

- ① チ|ギョの災い
- ② チ|は水よりも濃い
- ③ チ|の利を得る
- ④ チ|エの持ち腐れ
- ⑤ チ|に居て乱を忘れず

19

問二 傍線部Eの読みとして最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

E 挑|む

- ① のぞ|む
- ② いど|む
- ③ いな|む
- ④ ひる|む
- ⑤ もと|む

20

問三 空欄 ア・イ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

① 相対

② 象徴

③ 複雑

④ 可視

⑤ 理論

21

イ

① 信頼

② 相互

③ 友好

④ 対立

⑤ 主従

22

問四 傍線部 (a)・(b)・(c) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。

(a) したためている

① 下調べしている

② 考察している

23

③ 執筆している

④ 校正している

23

(b) うりざね顔

① つやがある血色のよい顔

② 色白で病弱そうな顔

24

③ 種のような小さな顔

④ 中高で面長な顔

⑤ 鼻の低い丸い顔

(c) 称揚され (る)

① ほめたたえられる

② ひっぱりだこである

25

③ めずらしがられる

④ もとめられる

⑤ あまやかされる

問五 傍線部（一）「スリムを理想とする美人のイメージを刷りこまれている」とあるが、具体的にはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

26

- ① スリムな美人のイメージを理想として信奉させられているということ
- ② スリムな美人になることが万人の目標として強要されているということ
- ③ メディアによって私たちの頭の中に理想のスリムな身体が刻印されているということ
- ④ ささまざまな広告等には必ずスリムな美しい女性の写真が印刷されているということ
- ⑤ メディアに登場する女性はスリムでなければならぬと宣伝されているということ

問六 傍線部（二）「袋小路」はどのような状態の比喩として使われているのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

- ① 物事が細分化された状態
- ② 瑣末主義に陥った状態
- ③ 物事が行き詰まった状態
- ④ 複雑に絡み合った状態
- ⑤ 危機きわまりない状態

問七 傍線部(四)「楽天的なまでの信念」とはどのような信念か。次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 身体を変形すれば心も美しくなれるという信念
- ② 吐き出すことで容易に減量出来るという信念
- ③ 規則的な食物摂取と運動が持続しうるという信念
- ④ 計画的に美しい身体を造り上げられるという信念
- ⑤ 心の持ちようによって身体が加工できるという信念

28

問八 傍線部(三)・(五)に対して、筆者が述べている意見として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選べ。

- (三) 「現代のさまざまなダイエット法やあれこれの痩身術」
 - ① 意思の力をまったく信頼しない点に問題がある。
 - ② 身体への嫌悪感をつのらせるだけのものである。
 - ③ 医学的にはじき出された標準体重を重んじている。
 - ④ 「嘔吐」を有効な手段のひとつとみなしている。
 - ⑤ 外的な働きかけによる身体管理を前提にしている。

29

(五) 「古代ギリシャの食餌療法」

- ①食と共に健全な性の営みを重視している。
- ②ふくよかな身体作りを目標にしている。
- ③身体よりも心の完璧さをめざしている。
- ④心と身体の一体化を重視している。
- ⑤食欲をなくすことを目的としている。

問九 本文の主旨と一致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①ほんとうの美しさは身体の「形」ではなく、心の「優しさ」にこそある。
- ②痩せて美しくなりたいという願望は女性にとつては永久普遍の願望といえる。
- ③スリムな身体作りのためのダイエットよりも心のダイエットこそ重要なのである。
- ④古代ギリシャでは目に見える姿よりも心の姿が優位に考えられていたのである。
- ⑤現代の身体感には、身体を心と不可分なものとして捉える観点が欠けている。